徳洲会リハビリテーション部会

高校生リハビリ職業体験会 全国58施設で一斉に開催！

徳洲会リハビリテーション部会は７月 26 日、全国の徳洲会グループ病院で「高校生のためのリハビリ職業体験会」を開催した。全国 58 施設が一斉に行い、高校生計 647 人、保護者計 186 人が参加。養成校の志願者不足が深刻化するなか、グループの規模を生かした初の全国一斉企画で、将来の医療を支える若手人材の発掘と職種の知名度向上を図った。



生駒市立病院（奈良県）は高校生50人、保護者30人とグループ最多参加者を記録



OTが実施する自助具を用いたリハビリを体験する参加者（千葉西病院）

同イベントは理学療法士（PT）、作業療法士（OT）、言語聴覚士（ST）といったリハビリ職種の認知度向上と、未来の医療現場を支える人材発掘が目的。現在、医療現場ではメディカルスタッフの確保が課題となる一方、全国の養成校では定員割れが深刻化している。

こうした現状に対し、福家晶子部会長（千葉西総合病院リハビリテーション室長）は、「従来は養成校を訪問して求人活動を行ってきましたが、養成校自体の入学者数が減少しており、病院がただ待っているだけでは手遅れになると感じています」と警鐘を鳴らす。そこで、同部会が従来の受け身の姿勢から脱却し、高校生に直接働きかける機会を創出。徳洲会のスケールメリットを生かし、全国一斉に職業体験会を開催した。

福家部会長は「全国一斉に行うことで、話題に上りやすくなると思います。また、これまで職業体験会をやったことのない病院も、これを機会に始めてもらいたいと考えました」と意図を明かしたうえで、「体験会を通じて、参加した高校生が職業への理解を深め養成校に進学し、将来的に徳洲会グループや地域医療に貢献してくれる循環をつくりたいです」とアピールする。

当日は各施設が趣向を凝らしたプログラムを展開。他の職種と合同で開催する施設もあった。リハビリ部門では、PT による動作解説や電気治療体験、OT による自助具を用いた作業体験、ST による嚥下調整食の試飲や聴診器を用いた嚥下音体験など、実践的な企画が並んだ。また、若手セラピストとの座談会を設けた施設もあり、仕事のリアルなやりがいや進路相談に応じる場となった。

参加者86%から高評価！ ９割が次年度開催を希望

イベント終了後のアンケートでは、高校生の満足度は「非常に良かった」、「良かった」が計 86.3%と高評価。次年度の開催についても、約 9 割が「希望」と答えており、期待の高さがうかがえた。また、「OT や ST については、まったく進学を考えていなかったのですが、今回体験してみて面白そうだと思った」、「実際に体験をして、詳しく仕事内容を知ることができた」など感想が聞かれた。

岡一・副部会長（長崎北徳洲会病院リハビリテーション科室長）は、「初めて体験会を開催した施設も多く、試行錯誤がありました。アンケートでは参加者の満足度が非常に高く、PT 志望の学生が OT や ST にも興味をもつなど、大きな成果が得られました。一方で、集客の偏りや告知期間の短さといった課題も明らかになりましたので、次回に向けて、より早い時期での周知を進めていきたいです」と振り返った。

福家部会長も「全国で 600 人を超える高校生が集まったことは大きな成果であり、グループが一丸となって取り組んだ意義は大きいと考えます。保護者の参加も多く、奨学金制度の説明も含めて安心感を提供できたことも収穫でした」と意欲的。同部会では、今後も全国一斉の取り組みを継続し、人材育成の輪を広げていく考えだ。

浜崎・湘南鎌倉病院助産師

国際助産師連盟学術集会で口演 “マタニティ坐禅”に多くの反響

湘南鎌倉総合病院（神奈川県）の浜崎衣鶴子助産師は、ポルトガルで開催された国際助産師連盟学術集会で、同院が実践しているマタニティ坐禅をテーマに口演、分娩期和痛 VR（仮想現実）に関する臨床研究のポスター発表も行った。



「マタニティ坐禅を世界に向け発信でき、うれしい」と櫻澤・看護主任（中央）、竹村・看護主任（左）、浜崎助産師



マタニティ坐禅を発表したセッション終了後、多くの質問者が浜崎助産師（右）の前に

マタニティ坐禅は 2017 年から県内の建長寺で、和尚の指導の下に実施。これまでに延べ 500 人以上の妊産婦さんなどが参加した。「分娩に対する不安や恐怖は多くの妊婦さんが感じることであり、分娩の進行に影響を与えることから、坐禅の体験を通じて心や呼吸を整え、お産に向き合う力を育んでもらうために開催しています」（浜崎助産師）。

口演では、同院の分娩スタイルや参加者へのアンケート結果など紹介。回答者（266 人）の 98% が「非常に満足」または「満足」と答え、70%が出産準備に有益と回答した。また、建長寺の協力を得て作成した坐禅の方法を紹介する映像を上映し、聴衆がその場で坐禅を実践、会場が静寂に包まれる場面もあった。終了後は多くの質問が寄せられ、関心の高さがうかがえた。

助産師リーダーの櫻澤亜有子・看護主任（助産師）は「当院は、お母さんの産む力と赤ちゃんの生まれる力を最大限に引き出すお産を大切にしています。その一環であるマタニティ坐禅を世界に向けて発信し、興味をもっていただけたことを、とてもうれしく思います」と笑顔。

また「25 年には麻酔分娩を開始し、総合病院として麻酔分娩、自然分娩、アクティブバースなど、多様化する分娩に対応すべく、さまざまな選択肢を提案できる環境を整備しています。今後もこの取り組みを継続していきたい」と抱負を語る。

マタニティ坐禅の開始当初からかかわる竹村和子・看護主任（同）は「自分の内面を見つめたり呼吸を整えたりする坐禅は、お産だけでなく日常生活でも良い影響が期待できます」とアピール。

分娩期 VR 和痛は、分娩進行中に VR ゴーグルを装着しリラックスできる映像を見て痛みの緩和を期待するというもの。欧米諸国で効果が報告されているが、国内では同院の臨床研究が初だ。経膣分娩予定の妊婦さん 50 人を、VR 群 25 人と対照群 25 人にランダムに割り付け、VR 群には分娩中に 10 ～ 30 分の VR 体験を実施。19 人が実際に体験、うち 15 人が「ポジティブな体験だった」と評価したものの、NRS（11 段階で評価する痛みのスケール）では痛みの感じ方に統計的な有意差を認めなかった。

千葉西病院

三好・妊婦・授乳婦専門薬剤師

妊娠・授乳期の薬物療法 薬学生1000人に指導



「妊娠・授乳期の薬物療法は、止めてしまうデメリットも検討し判断してほしい」と三好主任

妊娠・授乳期は、基本的に薬を使わないとする傾向は、一般人だけでなく、医療者にすらいまだ根深く存在する。徳洲会グループ唯一の妊婦・授乳婦専門薬剤師である千葉西総合病院の三好文子・薬剤部主任は、世界のスタンダードである「母体への十分かつ適切な薬物療法の提供」を早期啓発するため、2020年から徳洲会グループ病院で実務実習を受ける薬学生に対し、オンラインによる参加型実習を提供。同実習を受けた薬学生は今年度で1,000人に達する。

実習は2日間に分けて行い、1日目は妊娠・授乳期の薬物療法の基礎知識を座学形式で学び、2日目は設定された場面で、どのように服薬指導（カウンセリング）するべきかグループに分かれ話し合う。取材した7月の実務実習ではグループ33病院から53人が参加した。

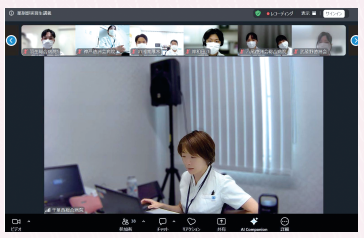
三好主任がとくに強調していたのは「ベースラインリスク」に沿った情報の提供だ。妊娠・授乳期の薬物療法は、流産や、形の違う子どもが生まれることを恐れるあまり忌避されがちだが、薬物を服用していなくても自然流産する確率は15%、形の違う子どもが生まれる確率は3～5%ある。これをベースラインリスクと呼び、その薬を使うことによるリスクが、ベースラインリスクを超えるかどうかが、薬物療法実施の大きな判断基準となると説明。

さらに、喘息の予防を適切に行わず重症化すると、胎児にも酸素が届きにくくなり、かえって流産の確立を上げてしまうこともあるなど、薬を使わないことによるデメリットについても十分な説明が必要と訴えた。「そもそもお母さんが元気でないと、妊娠や育児を続けることも難しくなります。母体の心身の健康を守る大切さをもっと知ってほしい」と三好主任。

薬のメリット・デメリットをすべて開示したうえで、飲むか飲まないか、最終的には患者さん自身の選択を尊重する「インフォームドチョイス」の考え方も解説した。

ロールプレイで、妊婦さん、授乳婦さんの立場を疑似体験した学生からは、「自分だけでなく周囲の人も、薬物療法について正しく理解していないと薬が飲みづらそう」など啓発の必要性を感じる声が聞かれた。

三好主任は、「妊娠・授乳期の薬物療法については、まだまだ医療者にも誤解が多い」と指摘、「今後、ベースラインリスクに基づいた薬の選択が当たり前の社会をつくっていくため、力を貸してください」と学生らに呼びかけていた。三好主任は徳洲会の妊婦・授乳婦薬物療法研究会の代表でもあり、グループ内外に向けた啓発活動を活発に行っている。



6年前から薬学生にオンライン実習を提供

武蔵野病院

自院救急車迅速搬送アピール

地域高齢者施設連携懇話会開く



地域の高齢者施設から60人が参加し交流

武蔵野徳洲会病院（東京都）は 7 月 31 日、院内で第 5 回地域高齢者施設連携懇話会を開催した。同院の特徴や実績などを共有し、連携を強化するのが目的。地域の高齢者施設から 60 人超が参加した。

冒頭、桶川隆嗣院長が挨拶に立ち、地域の高齢者施設を対象に、救急救命士が同乗する病院救急車を用い、無料のお迎え搬送を行っていることをアピール。24 時間の救急搬送ホットラインを完備し、施設側の負担を軽減しつつ迅速な受け入れが可能である点を強調、気軽に相談してほしいと呼びかけた。

続いて各診療科の医師が情報提供を実施。循環器内科の淺見貞晴部長は、高齢者や糖尿病患者さんは胸痛をともなわず、息切れのみで狭心症や心筋梗塞が進行している場合があることなどを解説。早期の検査と受診の重要性を訴えた。

消化器内科の高城健部長は、高齢者施設に入居中の 90 代女性に対し、繰り返す急性胆管炎に内視鏡的胆道結石除去術を施行し、ステントフリーに至った症例を報告。あわせて同科の豊富な内視鏡治療実績を紹介した。

糖尿病内科の重松嵩朗医長は、高齢者施設入所中の 2 型糖尿病患者さんに、間歇スキャン式持続血糖測定（isCGM）「FreeStyle リブレ 2」を導入した事例を発表。リアルタイムの血糖トレンド把握と適切なインスリン調整をすることで、HbA1c が 9% 台から 6% 台に大幅に改善した成果を示した。

泌尿器科の小島由太医長は、高齢者施設で頻発する尿失禁や尿路感染症（結石性腎盂腎炎など）について解説。適切な排尿管理が、発熱対応の減少やおむつコスト削減といった施設側の経営メリットにもつながる点を説いた。

最後に、司会を務めた呼吸器外科の田中良太副院長が、「むさとく呼吸器センター開設」を発表。急激な息苦しさや発熱をともなう気胸・重症肺炎など、緊急性の高い呼吸器疾患に対し、迅速に対応できる体制を整えたことを明かした。その後の意見交換会でも活発なやり取りが行われ、地域連携の絆をより一層深める機会となった。